

海陽町穴喰浦に伝わる古文書「震潮記」。室町から江戸時代に同地区を襲った4回の南海地震の被害が詳細に記されている。10年前に現代語訳された震潮記が、10代の若者4人の心を動かした。

徳島市立高理数科2年の小川拓泰さん(17)と吉田遊野さん(16)、榊真希さん(17)、有吉明世さん(17)は、同校が2017年3月に開催する防災フォーラムで、南海地震について発表する。

その資料として最初に読んだのが、震潮記だった。地震後すぐに高台に避難する教えは、何百年も昔から語り継がれていたことを、この本で初めて知った。4人は、その後も関連する文献を読みあさり、県立文書館(徳島市)の職員に聞き取りするなど勉強を重ねた。そのうちに、共通の不安を抱くようになった。大地震の経験がない自分たちの世代が、「その時」に、迅

意識の差 命守れるかの差

速な行動ができるのか。心配していたことが起きた。10月21日、鳥取県で最大震度6弱の地震が発生。教室では地震を知らせる携帯電話の受信音が鳴り響いたが、すぐに机の下に

研究を進める

徳島市立高生4人



南海地震に関する文献を手話し合う徳島市立高の生徒たち(徳島市で)

隠れたのは数人だけだった。自分たちも含め、反応は鈍かった。有吉さんは鳥取だったので「ここは大丈夫」と思ってしまった」と反省する。

「意識の差が、次の災害からどれだけ命を守れるかの差になる。同世代のみんなにそう呼び掛けたい」。先人の思いを継ぐ次世代の取り組みは始まっている。